

ブラッキー好きがブ  
ラッキー

南無雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目覚めると、そこはポケモンの世界。主人公はイーブイになっていた。これは不都合と戦いながらも一生懸命に生きていく主人公の話。本作品は、ポケモンの努力値、個体値、種族地などは考えて書きません。それと、作者は文才に自信がありません。それでも良いかたはどうぞ。

# 目次

プロローグ「慌ただしき目覚め」

1

第一話「現実」

3



# プロローグ 「慌ただしき目覚め」

『……は？』

目を覚ます朝、そこは見慣れない場所だった。

俺は、顔近くまで迫る、草の中で夜を明けたのだろうか。

いや、そんなはずはない。

俺は草どころか石すらない家の中、ベッドの上で寝たはずなのだから。

『ん？……なんだこれ？』

俺は見慣れない物が視界の右下にある事に気が付く。そこにはハッキリとこう書かれていた。

〔Lv1〕

あれ、レベル……これはもしかして、異世界に行ってしまった、とかいう展開なんじゃないだろうか。

俺は不思議に思い頭を振ってみるが、予想通り〔Lv1〕は俺の視界に付いて来る。

『キターーーー!!』

俺は、剣を持って魔王や巨大な魔物と戦っている自分の姿を想像する。

いや、魔法で戦うのも良いかもしれないぞ。魔法で戦うなら、やっぱり闇の魔法とか使いたいなあー。

そんな事を、そんな事を思っている矢先に、遠くの茂みが動く気配がした。

『さーてさて、始めの獲物は君にしよう』

そして視界が暗くなったと思い、上を見上げた瞬間に

ギャー

』

俺は絶叫した。

そこには、俺の身長を5倍程にした人間が、目を邪悪に光らせながら立っているのだ

から。

## 第一話「現実」

「なんじゃと？　こんな所にイーブイなんぞ生息しておったかの？」

そんな事を言いながら迫つて来るヒゲを生やしたおじさん。手には赤と白で出来た球を持っている。

やばい、あのボール何だか凄く嫌な予感がする。

「だがこれも調査じゃ。捕まえて損はしないじやろう。ついでに最近、旅に出る歳の女の子が一人おつたのう」

と言つて球を投げて来るおじさん。

『イタッ！』

ボールは頭に当たると、空中に跳ね返る。それから、当たつた反動で壊れたのだろうか、赤と白の部分がきれいに割れると……………俺は真つ暗な所にいた。

目の前には、拳だいの赤いボタン。

押したい。なんだか無償にこのボタンが押したい!!!!!!

俺は後先考えずに、そのボタンをグーで殴りまくる。

一秒に二回ぐらい押せたと思う。

それを10秒ぐらい続けていると、俺は体が浮いたような感覚におちいり、気づいた時には、先程までいた場所に戻る。

「やはりモンスターボールじゃ捕まえにくいかのおー。じゃからといって、ハイパーボールで捕まえたポケモンを女の子に渡すわけにはいかんしのお。それもういっちょよ」  
おじさんは、俺が出たと同時に新たなボールを用意していたようで、すぐにそれを投げつけて来る。

『アイタツ！』

そして先程と同じような所にまた来ると、今度もまたボタンを連打する。

それが22回ぐらい繰り返されただろうか。

俺が出て来るとおじさんはまた、新たなボールを手に持っていた。

あたりには、赤と白のボールが散らばっている。あれだけの物量を一体どこから出しているのだろうか、不思議でたまらない。

『ハあ、ハあ、ハあ、ハあ』

俺は連打のしすぎで、すでに息が切れている。

「なかなかしぶといのお。じゃが後77回は大丈夫じゃからのウ。ホッホッホ」

そういつて新たなボールを投げて来るおじさん。

『もう……ダメだ』

俺は限界の体力でも、それでもボタンを押したくなり、2秒に一回のペースでボタンを押しす。

これでまた俺は、手にボールを持ったおじさんの前に出るのだろう。そう思っていたのだが、今回は違った。

カチツつと大きな音が鳴ると、部屋に明かりが付き、俺は小さな小部屋に突っ立って  
いた。

『いっは……どっだ?』

小部屋には窓があり、窓を覗くと外の景色が見える。

そこには、先程までよりも更に大きくなったおじさんの顔があった。

「それにしても、こんな所でイーブイを捕まえるなんて、やはり長年研究者は続けるもの  
じゃのウ」

あれ、これ日本語?

さつきまで適当にきき流していた、おじさんの声を意識して聞いていると、どうやら  
日本語をしゃべっているようだ。

日本語をしゃべっているって事はここは日本……ではないよな。

ていうかさつきおじさんは何て言ってたのだろうか。

研究者がどうのこうの言つてた所しか聞いてなかった。

本当になんて言つたんだらうか。

『ふわあーあー』

なんだか異様に眠たくなつてきた。日本語とか、異世界とかがどうでも良くなつてしまふぐらゐに……。

『ベッド、ベッド』

早く寝たいと欲求から、部屋にベッドが無いか探す。

部屋は、床が鉄の様なプラスチックの様な物質で出来た物で、壁も同様に。タンスも無ければ、トイレもベッドも無い。この部屋に唯一あるとするならば、それは正方形の布団だけだった。

俺は部屋の隅にある、正方形の布団に寝転がり、これからの展開を朝起きてから、流れに任せる事にするのだった。

朝。起きるといふより起こされた。

いきなり、部屋の外に出されたのだ。

起こされたといふのに、やけに目と頭はさえる。

そして目の前には昨日の巨大じじいと、じじいより少し小さい女の子。

俺は昨日のあくどくボールを投げて来たおじさんを恨みがましく見上げた。

女の子が屈んで目線を合わせてくる。

「これからよろしくね！」

なにがこれからよろしく何だろうか。

「それにしても、本当にイーブイだけでよいのか？　今ならフシギダネが一匹おるのじゃが。わしはお主に、イーブイをやるとは言ったがフシギダネのおまけで上げようと思つとつたのじゃぞ？」

ん？　イーブイ？　フシギダネ？　何言つてんだこいつら。ここは魔法の世界なのに。バカだなく。それとも何かの技名かな？

巨人が「フシギダネ」って言ったら口からタネマシンガン見たいのが出たりしてね、うけえーる。……………はい、すいませんでした。ここ、絶対ポケモンの世界ですネ、わかります。目から出て来るこれ、なんだろ。

正直に言うとう、モンスターボールに入れられるまでは本当にわからなかったが、それからおじさんが言つてた事は全部ハッキリと聞いてたんだよねえ。

もう、現実を受け入れられなくて寝ちゃった。

「いいの。私、この子を気に入ったんだもん。それに始めに仲間にするって決めたポケ

モンを使つていくつて決めてたんだよ？」

「そうか。そこまで言うのなら何も言うまい。トレーナーがこだわりを持つ事は大事な事じゃからの」

「うん！ありがと。じゃあ名前決めてあげなくちやね。うくん名前はねえ……うん、イウビーにしよ！これからよろしくね、イウビーちゃん！」

そしてどうやら、このネーミングセンスがあらゆるさまざまな女の子が俺のご主人らしい。